

「つながり」と「ひろがり」

研究科長と新任教員が語る「新領域」の創りかた

研究科長
上田卓也 教授

新任教員
自然環境学専攻 平成24年4月着任
鈴木牧 准教授

上田 鈴木先生は、農学のご出身ですか。

鈴木 学部は北大の農学部でしたが、大学院は新領域のような独立研究科で、学位は博士(地球環境科学)です。それから京大、兵庫県立大、東大農学部の附属演習林におりました。兵庫県立大では、三田市にある「人と自然の博物館」で野生動物の生態を研究していました。

上田 私も農学部出身で、生まれたのは兵庫県のたつの市です。

鈴木 たつのにもイノシシとシカの影響の調査で行きました。

上田 イノシシはおいしいですし、鹿も食べればいいのにね(笑)。ばさばさしていますが、

ドイツではレストランで食べられました。

鈴木 私はまさにそういう関係の研究をしています。日本でも少なくとも明治時代頃までは野生動物を普通に食べていたようです。

上田 猪(い)の肉(しし)、鹿(か)の肉(しし)と呼びますからね。狸は食べられませんか。江戸川台の私の家の庭で出会ったことがあります。

鈴木 本当にタヌキでしたか。タヌキとアナグマは見間違えやすいです。タヌキは不味いのですが、アナグマなら美味しいようです(笑)。

人と人とのつながりを創るには

上田 こちらに来られる前は、新領域にどんなイメージをお持ちでしたか。

鈴木 いろいろな人が集まって新しいものを創り出しているんだろう、というイメージでした。私の専門は生態学ですが、社会学、経済学、数学のネットワーク理論や複雑系理論とのつながりも深い分野です。そういう最先端のお話が聞けるのでは、と期待していました。

上田 実際には、どうですか。

鈴木 そういう方々とお会いする機会が全くありません。

上田 「学融合セミナー」で基盤、生命、環境の先生方の話が聞けますが、交流の場は少ないかもしれません。ドイツの研究所では、十時のコーヒータイトに全員が参加でした。柏でも、数物連携機構では三時にホールでティータイムをしています。

鈴木 はい、テレビで見ました。

上田 柏にいてのに(笑)。

鈴木 ホワイトボードの周りに集まって議論したり、本当に素敵です。でも、日本人はシャイなので、他人とぱっと会っていきなり話すのは苦手かもしれません。逆に学問から入るほうがうまくいきそうです。ネットワークのハブになるような方が必要ではないでしょうか。この人とこの人を話させたら面白そうとか、人と人とを結びつけられる方です。

上田 なるほど、まだまだ工夫の余地

がありますね。学融合セミナーも、パネルディスカッション形式が良いですね。「創成」の記事も、すべて対談にしますか(笑)。

柏キャンパスの目指すもの

上田 新領域での忙しさはいかがですか。

鈴木 こちらは教授会が少ないのに感心しました。演習林では、会議が多かったので、また、大学のミッションが、教育、研究、社会貢献の三つとすると、演習林では、地域の要請を受けて社会貢献が多くなりがちでした。

上田 大学は、法人化以降、いろんな評価にさらされています。社会貢献としてイベントを行った、産学連携でベンチャーを立ち上げた、というのは、成果として目に見えやすいのです。一方、研究の将来性の評価は難しく、教育の成果も卒業後十年経たないとわかりません。しかし、大学のミッションはやはり研究と教育です。東大が柏に新しい研究科を作った意味は、落ち着いた環境で新しい領域を切り拓く研究を行うこと、またそれができる人材を育てることです。

鈴木 私自身はこちらに来て、ずいぶん研究の時間ができた気がします。

学生の教育

鈴木 本郷の大学院では、学部からそのまま学生が来るので、学部と大学院で何を教えるか、が確立しています。

上田 新領域では、七割くらいの学生が他大学から来ます。多様な学生が集まり、新しい教育を受け、新しい研究をすることが目標です。

鈴木 新領域の学生で、目的意識が明確な方は問題ありませんが、こういう環境で勉強したい、という憧れが先で入ってくる方もいます。昔は、自分の良く見知った学問分野に進学するのが普通でしたが、今は、基礎知識の無い分野にも、ぱっと飛び込んできます。自分はチャレンジングな状況なのだから格段の努力が必要だ、と考える学生もいますが、入試は

受かりました、では何をしたらよいでしょう、という学生もいます。目的意識も知識レベルも大きく異なる学生を指導する難しさを感じます。

上田 学生の知識レベルを揃えていく教育も必要ですが、それ以前に、モチベーションの違いが問題でしょう。教員が学生の面倒を見過ぎていないのかもかもしれません。学生も教員に道を示してもらおうのが当然と考えているのでは。今は情報があふれていて、その多さにふりまわされているように思います。一番大事なことは、自分で考える力を身につけさせることです。難しいですけど。

鈴木 欧米の大学院は、コースワークによる知識の習得に大きなウェイトがありますね。

上田 はい。一方、研究活動に早く触れさせる日本の卒論研究・修論研究は、研究現場では評価されています。日本は手を動かす現場力が強い、そういう日本の長所は大事にしたいものです。

留学生へのサポート

上田 柏は国際的なキャンパスを目指していますが、留学生には欧米と同じスタイルの教育ではなく、日本の長所を活かした教育を提供すべきでしょう。また、そういう魅力を海外に発信することも大事です。

鈴木 留学生には、周りの人と積極的に接しとけ込んでいける方と、内向きになって教員以外とは話もできなくなる方がいるように思います。後者の方を何とかしてあげられないでしょうか。

上田 柏インターナショナルオフィスなど支援のシステムがありますが、研究室以外の友人を作ってもらうことも大事です。将来は、柏第二キャンパスに学寮を作り、外国人学生と日本人学生の両方が住んで近所付き合いができるような環境を作ることが理想です。

横断的研究組織で学融合を

上田 新領域は専攻単位で「教育」を行っています。研究」のための専攻横断的な

組織も育てています。「研究センター」として現在五つあります。センター長が研究目標を定めてプロジェクトを組み、人をピックアップして共同研究ができる仕組みです。

鈴木 大きいセンターや大きいプロジェクトも良いですが、運営が大変になるので、一緒に科研費の申請を書くぐらいの、小さなものもあるとありがたいです。

上田 もっと小さな「研究コンソーシアム」という研究組織も作れます。小さな芽を育てることが柏ではできるようにしたいと思っています。研究科の予算は、現在は教育組織である専攻に配分していますが、将来的には研究組織にも配分することが、新領域の創成には有効だと思います。

緑のキャンパス

上田 「鹿を美味しく食べる」研究コンソーシアムができるといいですね(笑)。

鈴木 本当にやりたいです。全国の自治体が鹿肉の有効活用に取り組んでいますが、流通や商品開発の面で課題が多いので、各分野の専門家の参画が必要だと思います。千葉県でも年間二千頭ぐらいのシカを駆除していますが、ほとんど利用せず捨てています。鹿肉は口に合わないという人もいますが、ヒツジのように、慣れてしまえば食べるようになるのではと思います。在来種の問題だけでなく、千葉県には現在日本にいる外来哺乳動物がほとんど全部いるとも言われていて、生物相の保全が大きな課題です。

上田 柏キャンパスの自然はどうですか。

鈴木 柏キャンパスや周辺にはたいへん良い自然が残っているので、学生の実習にも使いたいです。

上田 柏キャンパスはまだ樹木が育っていないので、駒場の学生から駒場や本郷に比べて緑が少ないと指摘されたことがあります。緑を育てて、しずかに落ち着いて研究と教育に専念できるキャンパスにできればと思っています。

